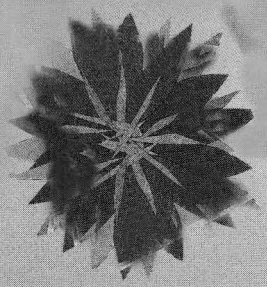
丸岡秀子の贈り物

稲垣信子

岩波書店

丸岡秀子の贈り物

稲垣 信子



岩波書店

丸岡秀子の贈り物

定価 1600 円(本体 1553 円)

1994 年 7 月 26 日　第 1 刷発行

著　者　稲垣信子(いながきのぶこ)

発行者　安江良介

発行所　株式会社 岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電　話　案内 03-5210-4000

印刷・理想社　カバー・半七印刷　製本・三水舎

© Nobuko Inagaki 1994
ISBN4-00-002147-8　　Printed in Japan

R〈日本複写権センター委託出版物〉本書の無断複写は，著作権法上での例外を除き，禁じられています．本書からの複写は，日本複写権センター(03-3401-2382)の許諾を得て下さい．

I 出会い……1
苦い想い出 2
「主人」と呼びますまい 10
悲しみの湖 21
二つの長編小説 28
教育の荒廃 38
II 交流……47
精神の栄養 48
〈精神の栄養〉講演録 52
丸岡秀子ブックフェア 86

未亡人時代　96
奈良回帰　106
Ⅲ　こだま……115
逆　縁　116
〈レイからの贈り物〉小説作品　128
五月飛翔　180
丸岡秀子の贈り物　185
あとがき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

I

出会い

苦い想い出

昔ながらの細い道の両側には、こまごまとした店が立ち並び、いかにも庶民的な面ざしをみせていたが、ひとつ角を曲って別の道筋に入ると、にわかに植込みの濃く繁った屋敷町となった。長く連なった石塀は、一戸一戸がかなりの敷地を有していることを示し、あたりは森閑と静まりかえっていた。

戦前からの家屋らしく、どの家も古びてはいるが木組のしっかりした重厚な構えで、どことなく威圧的でさえあった。

丸岡秀子の家はすぐにみつかった。両開きの広い門はぴったりと閉ざされているので、わたしたち四人は背をこごめて潜戸から中に入った。さまざまな樹木が枝をさし交わし、

雑木林に迷いこんだようである。足元から点々と白く石畳が続き、奥のほうに縁側らしいガラス戸がみえた。

「あちらがきっと先生のお宅よ」

姉貴分のNさんがささやく。わたしたちも無言でうなずいた。

約束の時間かっきりに着いたせいか、ごめんくださいの一言で、丸岡秀子そのひとが立ち現われた。わたしはおそらく家族の誰かが出てきて秀子に取りつぐのだろうと思っていたので、写真で何度か見たことのある彼女自身が直接出迎えてくれたのにびっくりした。

「どうぞ、お荷物やコートは、そこの籠にお入れください」

廊下の隅に手造りの籠がいくつも重ねられている。それはいかにも農村問題の評論家らしい置物だった。

わたしの一〇代は、この背負い籠をせなかに、往復四キロの山道を桑摘みに行ったことでつづられている。そのほか、手甲、脚絆、大小いくつかのザル(その大きなものは、玄関においてお客さまの手まわりの品を入れる乱れカゴがわりにしている)、手織り絣のモンペなど、さ

まざまな生活用具が、部屋の隅におかれたり、壁に下げられたり、勝手なところにあって、わたしの心をやすめてくれる。（『丸岡秀子評論集』第三巻、未来社、一九七八年刊）

まさにここに綴られているような部屋であった。それにしても丸岡秀子の装いはシックで美しかった。

おなんど色の着物に濃い臙脂の絞りの羽織、つづれ織りの帯を低くつけ、左手のくすり指には大きな紫の指輪をはめている。歌人とよびたいような出立であった。

「さあ、どうぞ、おらくになさってください」

甘くやさしい声がその雅やかな姿をいっそう引き立てていた。

わたしたちはいまさら遠慮してもはじまらないとばかり、ずいずい奥へ進み、テーブルの両側に坐った。時を測ったように奥の引戸があけられ、若い女性がお茶を運んできた。しとやかな物腰で一人ずつ茶を淹れ、テーブルに置くと、にっこり会釈して引き退った。丸岡秀子からの紹介はなかった。

ひとわたり茶を啜りおえると、打ち合わせ通りNさんが講演依頼の口火をきった。丸岡

秀子に、奈良女子大学の先輩として、同窓会東京支部の定期総会で、講演してもらおうというのが、わたしたちの訪問の目的であった。

女高師から女子大へと戦後改革された卒業生の求めているものは、単なる良妻賢母ではなく、幅広い女の生きかたである、その意味では先生のようなお方のこれまでの生きざまをお話しいただきたい、とNさんは真正面きってのべたが、緊張のせいか顔面蒼白で、ひきつったような口もとをしていた。

「やっぱり、女子大の方は違いますね。わたしなんか、とてもお役に立ちそうにありませんわ」

Nさんの固い表情が伝染したように、丸岡秀子の顔もこわばってきている。

「わたしはみなさんと違って女高師での成績も落第すれすれで、遊んでばかりいましたし、みなさんのように立派な先生にもなれませんでしたのよ。いわば奈良の落ちこぼれなんです。そんなわたしを引っ張り出されても、あなたたちがお困りになるだけですよ。きっとご先輩の方たちも眉をひそめられますでしょう」

どうやら丸岡秀子は、はじめから断わるきっかけを探していたらしい。

わたしは丸岡秀子のすぐ隣に坐っていたので、彼女のほっそりとした横顔をまぢかに見ることができた。

「先生、女高師とちがって女子大は単なる一地方大学にすぎません。その上、共学の大学に較べてどこか力も不足していますし、特色も失われてしまっています。教師にさえなれない、というのが現状なのです。そのあたりのお先まっくらな後輩たちに、カツを入れていただければと思うのですが」

電話で訪問の約束をもらったのは自分だと前置きし、わたしは真横から迫った。

「その、センセイ、とお呼びになるの、やめてくださらない」

丸岡秀子の白い花びらのような顔がこちらを向き、ふうわりとほほえんだ。わたし自身も先生と呼ばれるのは嫌いである。それがなんのためらいもなく、秀子を先生と呼んでいた。わたしは真赤になってうつむいた。失敗した、と思った。

「わたしは最近二度ほど大病しましてね。おなかを切っておりますの。すこし根をつめますと、もうガタガタになってしまいます。情けないけれど本当なんです。カツを入れていただきたいのは、わたしのほうよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

眼鏡ごしにつぶらな眸をしぱしぱさせている。丸岡秀子はこの時六十八歳、七年前に子宮ガンの手術を受けていた。

「それにね、ほんとうのことを申しあげますと、わたしは奈良女高師の一年生のときに、忘れられないつらい想い出があるのです」

紫の大きな指輪をひっそりと撫でるようにしながら、丸岡秀子は四人を静かにみまわした。

「同じ寮舎にいた三年生のかたが、門限に五分遅れただけで、有無をいわさず即刻退学させられてしまったのです。その当時の音楽の先生はとても素敵なかたで、みんなの憧れの的だったのですけれど、その先生のお宅に遊びに行って遅れたわけなんです。門が閉められてしまったので、塀をのりこえて戻っていらしたのですけれど、舎監の先生に手をついて謝まったのにもかかわらず、わたしたちが翌日授業に出ていて留守のあいだに、郷里から親御さんが呼び出され、そのまま連れ帰ってしまわれたのです。あと一年で卒業というひとを、たった五分の遅刻ですぐに退学処分にしてしまうなんて、人権蹂躙もはなはだしいと思いませんか。生徒に対して、なんの温情もない冷酷無比な仕打ちでしょう。わた

しはそれ以来、母校でありながら奈良女高師に深く絶望しているのです」

丸岡秀子の声は暗いしめりを帯びていた。今でもその時のことを思い出すと胸が疼く、というふうであった。四人ともさすがに沈黙してしまった。

奈良女高師を卒業して四十数年にもなるというのに、いまだにそのことを許せないと胸底深く刻みつけているのは、並大抵の執念ではない。おそらくその事件は、教育評論家としての丸岡秀子の激しい火種となっているのであろう。講演会拒否は決定的だ、わたしは力なく頷いていた。

ちょうどこの年、丸岡秀子は初の自伝的小説『ひとすじの道』の第一部を偕成社より刊行していた。もしかしたら六年後に発刊される第三部の構想を練っていた時かもしれない。その第二章の「熱い息吹」に、この退学事件のことが詳しく描かれているのだ。

また、『いのちと命のあいだに』(筑摩書房、一九八四年刊)の中の「陶工と詩人　富本憲吉夫妻」にも、次のような形で表現されている。

そして、その逼塞状況の中で起きた事件の一つが、若い魂を打ちのめした。何十年も前のこ

とだった。同寮の三年生が、日ごろあこがれていた音楽教師を訪ねて、寮の帰り時間に五分おくれて帰った。そしたら、翌日は即時退学。事は隠密のうちに運ばれ、学生は誰も知らないうちに、親が呼ばれて引き渡されてしまっていた。

そして決定的なのは、『日本婦人問題資料集成　第十巻　近代日本婦人問題年表』(ドメス出版、一九八〇年刊)の一九二〇年(大正九年)の事項である。編集責任は、丸岡秀子と山口美代子。

〈6・18　奈良女高師文科3年生2人、門限5分遅れたため退学処分で紛議〉

奈良女高師一年生の時の、この理不尽な退学事件が、丸岡秀子に終生忘れることのできない衝撃を与えたのだった。

唯ここでわたしは、母校のためにひとつだけ付加しておきたいことがある。

『奈良女子大学六十年史』(一九七〇年刊)の「年表」に、大正九年の項として次の一行がみられる。

〈7・1　評議会　生徒の門限延長決定〉

6・18に退学させられた学生は、この延長決定の恩恵は受けられなかったのであろうか。わずか二週間の差である。なんとか復学、という処置にはならなかったのか。謎が残る。

わたしはこの次は、高校図書館の現場にいるひとりの教師として、女として、小説家の卵として、丸岡秀子を訪ねたいとおもっていた。ものやわらかな声と美しい和服すがた、そしてあの憎悪とさえ言いたいような激しい母校拒絶の態度との乖離を探りたいとおもっていた。

「主人」と呼びますまい

丸岡秀子の少年少女向け自伝小説『ひとすじの道』(第一部)が、一九七二年の青少年読書感想文全国コンクールの課題図書(高等学校の部)に決定した。主催は全国学校図書館協議会と毎日新聞社。高校図書館というわたしの現場に、丸岡秀子がずいと入りこんできた。このチャンスをおいて他にない。

わたしは「学校図書館　速報版」でそのことを知った直後、丸岡秀子に電話した。講師

依頼を拒否されたあと、そういう苦い想い出を持っていらっしゃるとはぞんじませんでしたので、ご無理お願いして申しわけありませんでした、という手紙を送ってあったせいか、電話口での彼女の応対はものやわらかだった。

「貧乏に育った少女の話で、いまのお若い方にはおもしろくもおかしくもないでしょうけれど、先様がお選びくださったので、ありがたくお受けいたしました」

ことばの裏に嬉しさが滲んでいた。

「あの課題図書に選ばれますとね、全国の高校図書館が少なくとも複本で揃えますし、学校によっては国語科が推薦して、読書感想文コンクールに応募させますから、ベストセラーになりますよ、わたしの図書館でも五冊注文しました」

わたしはわざと軽薄ともとられるような言いかたで、ベストセラーを強調した。

「それはまあ、出版社がおよろこびになるでしょう。わたしにはあまり関係がございませんけれど、読んでくださる方が多いのは嬉しいことです」

わたしはこれを機会に、いちど独りでお宅を訪問したいと申し出てみた。

「お若い方とお話しするのは、わたし大好きなんですよ。いろいろ教えていただきたい

こともありますしね」

高校図書館の現場にいるということを、この時ほど幸運に思ったことはない。話したいことは山ほどあった。

応接間で丸岡秀子を待っている間、わたしは一方の壁を埋めている本棚を眺めた。壁掛けや置物、写真などのどれよりも興味があった。

岩波書店から刊行中の『奈良六大寺大観』が分厚く白い背表紙をみせて威容を誇っている。

「これは充分に時間をかけてみなければ。読まなければ。いずれ、その時を持つことにしよう」と、ひそかにその時を恃んでは、一番目立つところに並べてゆき、ついに十四巻となった。

（『丸岡秀子評論集』第二巻、未来社、一九七八年刊）

この写真集の中には、丸岡秀子の奈良四年間の苦い想い出もなつかしい想い出も、すべてこめられている。わたし自身も学生時代、孤独の中でその寺々を廻り歩いていた。奈良

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.